

闇市を起源とする都市空間の空間的継承
—新橋駅前ビルにおける闇市の建築空間の分析と更新計画—

建設学専攻
プロジェクトデザイン研究

DZ20692 さいとう かなと
指導教員 齊藤 奏斗
岡野 道子

序章 はじめに

0-1. 研究背景

普段何気なくまちを歩いていて、どこか好きな空間がなぜ好きと感じるのか、どのような歴史をたどりその空間が生まれているのか、という日常の疑問から「闇市」という存在にたどり着いた。今日を生きるために作り上げた闇市を、戦後直後の人々の「生」に対する活力の象徴であると捉え、現代に残る闇市起源の空間を紐解く。

0-2. 研究目的

本研究では、そのような状況にある闇市を起源とする都市空間の形態を、都市的な目線から分析し、垂直型に着目することで現在どのような形で存在しており、今後の再開発がどうあるべきかの一例を提案することを目的とする。

0-3. 研究対象・研究方法

東京都内の大規模な闇市があった場所を研究対象とする。網羅的に闇市起源の都市空間について分析・分類を行った後に、特異な事例である新橋の建築空間について平面構成と利用者の行動からその特性を明らかにする。

1章 闇市の発生と変遷

1-1. 闇市の発生

1-1-1. 闇市の社会的背景

戦時統制下で発生した闇取引は、敗戦後の配給崩壊と深刻な物資不足により、終戦後に闇市として表面化し急拡大した。それは飢えを逃れ生き延びるための不可欠な手段として、人々の生活に深く定着していった。

1-1-2. 都市・建築的視点から見る立地特性

闇市は都心近くの主要な駅の周辺に大規模な闇市が形成され、さらに郊外を含む多くの駅前や道路沿いに中小規模の闇市が形成された。

1-2. 闇市の整理

闇市は1946年2月から徐々に行政による取り締まりを受けていく。初めは流通統制下で禁止物資を流通させた場合と、公定価格に違反した価格を設定した場合であった。行政による戦災復興土地区画整理によるマーケットの整理やGHQによって1949年に行われた露店整理事業によって、東京都内は1951年12月には全ての露店が撤去された。マーケットは1961年3月31日に戦災復興区画整理事業が完了し、整理が終わった。

2章 闇市起源の都市空間の現状

2-1. 闇市起源の都市空間

2-1-1. 闇市起源の都市空間の定義

本論文において「闇市起源の都市空間」とは、戦後の混乱期に自然発生した闇市や露店群を起源とし、その後の露店整理事業や再開発などの変遷を経て、現在までその文脈が継承されている街区、商店街、および建築群の総称と定義する。

2-1-2. 闇市起源の都市空間の形態

3つの類型である「線形」「面形」「垂直形」の定義を明確にする。まちの骨格が一本の主要な通りによって構成されている。または、航空写真での形状が幅に対して、長さが圧倒的に長いもの。面形はある程度の面積を持つ“面”を持つ。あるいは、複数の道に均質的に店舗があるもの。垂直型は4階以上のビルに建て直されているもの。

2-2. 闇市の建築空間

闇市の建築空間を以下のように定義し、その現存の有無を示した。

- ・複雑な路地構造をもつ
- ・道幅 1000~1500mm の細い道を持つ
- ・周囲に比べて1店舗あたりの面積が小さい

2-3. 現状分析 調査シート

2-3-1. 闇市起源の都市空間の分析データシート

24ヶ所すべての現在の闇市起源の都市空間と、露店整理事業が行われる前の同場所の街区や路地の都市構成や、露店・マーケットの様子を網羅的に明らかにするために、航空写真と実地調査による調査を行いデー



図1：闇市起源の都市空間の分析データシート

タシートとした。

2-3-2. 闇市の建築空間の消滅傾向

闇市起源の建築空間が消滅するパターンは、防災や利便性向上のための道路整備により路地の特性が失われる「線形」の変容と、再開発ビル化に伴い区画が統合・均質化される「垂直形」の変容の2つに大別される。これら近代化による空間の喪失傾向に対し、ビル化を経ても極小の区画割と迷路的な構成を維持する新橋駅前ビルは、極めて特異な事例であると言える。

2-3-3. 闇市起源の都市空間の地理的分析

都内の闇市起源の空間は、戦後の物資輸送を担った国鉄路線網に沿って分布する傾向がわかる。特に地価高騰が著しい都心部では土地の高度利用により垂直型への移行が進んだが、新橋はその過程でビル化されながらも、内部に闇市特有の空間構成を維持している。

これは大規模な闇市跡地の中で唯一の事例であり、極めて特異な存在と言える

2-3-4. 特異な例「新宿ゴールデン街」



図2：大規模な闇市の現在形状プロット

新宿ゴールデン街の特異性は、換地が行われたことで一度闇市の文脈が途絶えているにも関わらず、現在もその形を保持している点と前項で述べた都心において面形で現存している唯一の事例であるという点だ。新宿ゴールデン街については、既に研究が行われている。阿川の研究では1985年～1995年の店舗減少期に不審火が頻発し、これを防ごうと「新宿花園・ゴールデン街を守る会」が発足し、まちを守り抜いたことにより結束が強くなったとされている。ここから、新宿ゴールデン街は店舗同士の団結により、現在まで存続させてきたと考察する。

3章 特異な事例「新橋」の建築空間

これまで闇市があった場所の多くは、区画整理等によって現在ある住宅街や駅前広場、ビルへと姿を変え、その区割りや闇市の雰囲気は消滅されてきた。今後も再開発が行われることは自明であり、闇市の建築空間のその性格は失われていく可能性が高い。その中でビルという、一見闇市と正反対の建築と共存している事例を調査し、その性格を紐解くことが現在の他の闇市空間の保存につながると考える。

3-1. 調査対象の概要

新橋の闇市の建築空間が残る事例としてニュー新橋ビルと新橋駅前ビル1号館・2号館がある。今回はより細く入り組んだ道を持つ新橋駅前ビル1号館を対象としてテナント部、共用部の面積割合比較を行う。比較対象として、汐留シティセンターを選出した。

3-2. 平面構成比較

3-2-1. 平面図データ

3-2-2. 面積比較結果と分析

平面構成の比較から、新橋駅前ビルは現代的な汐留シティセンターとは対照的に、極めて微細な店舗粒度で構成されていることが判明した。その共用部は狭隘ながらもフロアの半数を占め、総延長の長い迷路的なネットワークを形成している。さらに汐留の約8倍に及ぶ店舗密度は、歩行者が接する情報量を増大させる。この「微細な粒度」と「高密度な情報」こそが、歩行者の探索欲求を刺激し、回遊を誘発する構造的要因である。

3-3. 歩行距離分析

3-3-1. 調査概要と分析手法

調査対象の2つのビルの利用者が対象階に入ってから、目的地にたどり着くまでを追跡し、その経路を記録する。実際に歩いた長さから最短距離から迂回率を求

めることで、闇市の建築空間が与える探索誘発性を明らかにする。

3-3-2. 歩行距離測定データシート

各ビル25人、合計50人の歩行距離測定データシートをまとめた。

3-3-3. 歩行距離調査の結果と分析

調査の結果、汐留シティセンターの迂回率が平均1.5と効率的な移動を示したのに対し、新橋駅前ビルは2.4と顕著に高く、能動的な探索行動が確認された。これは屈曲した通路と高密度な店舗が生む情報の複雑性が好奇心を刺激するためである。この高い数値は、闇市由来の迷宮的な空間構造が人々の探索本能を喚起し、移動空間を発見の場へと変質させていることを定量的に証明している。

3-4. 奥行き探索誘発性

歩行経路の分析から、動線を効率的な主動線と闇市的な補助動線に分類した。特筆すべきは、主動線の上にある補助動線が下部に比べ圧倒的に利用されている点である。これは、下部が平行に接続するのに対し、上部は垂直に接続し奥性が強調されていることに起因する。この視覚的な奥行きこそが歩行者の探索本能を刺激し、迷宮的な空間への流入を誘発していると考えられる。

4章 新橋駅前ビル1号館を対象とした設計提案

2030年代に完成予定の再開発が計画されている新橋駅前ビル1号館地下1階を対象としてリノベーションの設計提案をする。

本設計では、闇市由来の探索行動を誘発する空間構造の再構築を行う。第一に、新生商店街の地図を現状平面に重ね合わせ、かつての高密度な路地形態を物理的に一部復元する。第二に、主動線の幅員を縮小することで補助動線との幅員差を解消し、利用者を空間深部へ引き込む。第三に、汐留の受動的な鑑賞に対し、路地の奥に小規模ギャラリーを分散配置することで、能動的な探索対象としてのアートを提示する。かつて生活物資を求めて彷徨った空間体験を、現代における価値発見のプロセスへと昇華させ、新橋独自の場所性を継承する。

5章 終わりに

再開発ビル内でも闇市の建築空間は独自の価値を持つ。今後の他の場所の再開発で高度化されることがあっても、闇市の空間の特性が内部に反映されることで、利用者に闇市の体験を与える空間となることを期待する。

参考文献

- (1)阿川誠：飲屋文化の空間構成に関する研究 その1 -新宿ゴールデン街の店舗空間の構成-：日本建築学会論文集, 823-824, 2020
- (2)藤木 TDC：東京戦後地図 ヤミ市跡を歩く実業の日本社 2016. 6
- (3)石樽督和：戦後東京と闇市 新宿・池袋・渋谷の形成過程と都市組織, 2016
- (4)橋本健二/初田香成：盛り場はヤミ市から生まれた, 2013
- (5)松平誠：ヤミ市幻のガイドブック, 筑摩書房, 1995
- (6)石樽督和：商店建築, 2019. 2～2019. 7